



ハートの印のなかに、ベレー帽をかぶった、おしゃれな鶴が一羽。そのわきに「鶴の恩返し」という文字が入っている。ちょっと変わったこのマークが、ポロシャツの胸にも、配食サービスの車のとびらにも描かれていた。鶴の恩返し。

これがお年寄りや障害者の手助けをする、福祉ボランティア・サークルの名前なのだ。

Essay

鶴の恩返し

宮下展夫 Nobuo Miyashita

神奈川県共同募金会 理事
元朝日新聞編集局編集委員

「ありがとう」に支えられて

このサークルは、横浜市鶴見区の潮田地域ケアプラザにある。

サークルの人たちは、定年退職した男性を中心にしていて、四十八人のグループの六割が六十歳以上。いちばん年上の桜井孝さんは七十五歳になるといふ。桜井さんは鉄鋼関係の会社を退いてから、ボランティアを始めた。「桜井さんには、『おたすけまん』の隊長をしていただいています」

このサークルの創始者の一人、重岡昭男さんが説明してくれた。おたすけまんは、ひとり暮らしの老人の要望に応じて、庭の草取りやちよつとした家の手入れなどをする、「地域の便利屋」だ。

「お年寄りの家を回ると、やってほしいことがいろいろあるんですね。そこで定期的にパトロールして、ちよつとしたことをやって差し上げる。広報紙にサークル参加者の募集広告を出すのですが、桜井さんは、『電気器具の修理ならできますよ』と申し出て、参加してください」

鶴の恩返し、おたすけまんなど、名前のつけ方がユニークで、たのしい。定期パトロールも「あなたを見守り隊」という名前がついている。

「サークルの名前はみんなで考えましてね。みんなといつても、あのころは五、六人しかいませんでした。『あの道この道』とか『と

うりやんせ』とか、いろいろ出ました。投票したら、『鶴の恩返し』に票が集まりました。鶴見に住んでいるので、地元で恩返しをしようという気持ちで」

サークルができたのが三年前の一月である。横浜市の社会福祉協議会が催した「男性のための福祉講座」がきっかけだった。せっかくなので福祉講座を聞いたのだからと、講習を受けた人たちにボランティアの呼びかけをしたが、集まったのが四人。これだけしか集まらなかったことは、ショックだったようだ。ともかく四人でなにかしようとして話合せて、さて、なにをしたらいいのかわからない。

「ちよつと女性のボランティアグループが、ひとり暮らしのお年寄りや障害者に週一回の昼食を作っていて、その配達を手伝うところから始めたのです」

昼食をとどけて、すこしお年寄りとお話をする。やがて昼食に「やってほしいことがあったら、いつてくさい」と折り込みを入れて、おたすけまんの活動が始まる。

活動は、お年寄りや障害者が外出するときの送迎サービス、ワープロ、パソコンの障害者教室、デイサービスの手伝いと広がる。「ボランティアに参加する人の趣味や得意が生きるようにしています」

重岡さんは、大きな爪切りを取り出した。片手しか使えない障害者のための爪切りだ。

こうした工作は、手先の器用なボランティアが考え出した。

重岡さんは六十六歳。町で薬局を経営していた。ボランティアの仕事が忙しくなると、二年前に薬局をやめた。

「なぜ、そんなにボランティアに夢中になっているのですか」

ちよつと意地の悪い質問を試みた。すぐ反撃された。

「宮下さんはボランティアの経験がないのですか？」

ひと呼吸置いて、重岡さんはこういった。「ボランティアをして『ありがとう』といわれると本当にうれしい。幸せな気持ちになる。自分が楽しくてやっているんです。暮らしのほうは年金をいただいていますから」

重岡さんの拠点になっている潮田ケアプラザでは、その日、お年寄りのデイサービスが行われていた。私とその部屋をのぞいたときには、ちよつとお年寄りたちが引き揚げたところで、恰幅のいい男性がひとり、椅子のかたづけをしていた。

「あの方が桜井さんです」と重岡さんが教えてくれた。あいさつをすると、桜井さんはほほえんで、ていねいにあいさつを返した。